

砂 田 姥 沼 遺 跡

平成19年5月

宇都宮市教育委員会

序

宇都宮市の東谷・中島地区付近は、小河川による低地に刻まれた低位台地が南北に広がっています。この微高地は近年の開発により、従来からの農村風景がその姿を次第に失いつつあります。しかしその反面、この地に展開する大規模な遺跡群は、記録保存のための発掘調査により、杉村遺跡、権現山遺跡、磯岡北遺跡などの古代集落や東山道といった貴重な遺跡が複合して存在していることが確認されています。

今回、株式会社東京レンタルの施設建設に伴い、影響を受けることとなった本遺跡の取り扱いにつきましては、関係機関との協議のうえ、記録保存のため発掘調査を実施することとなりました。その結果古墳時代の竪穴住居跡や当時の遺物が多数確認されるなど、本地域の古墳時代集落の性格などを知る上で貴重な資料を得ることができたものと考えております。

本報告書は、発掘調査において得られた成果をまとめたものであり、多くの方がさまざまな方面におきまして広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、埋蔵文化財の取り扱い協議から発掘調査、そして報告書作成・刊行に至るまで多大なるご協力とご理解をいただきました関係各位、関係機関並びに終始ご協力いただきました地元関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成19年 5月

宇都宮市教育委員会

教育長 伊藤文雄

例　　言

1. 本書は、栃木県宇都宮市東谷町インターパーク51街区4画地に所在する砂田姥沼遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は宇都宮市教育委員会が主体となって行った。現場実務は宇都宮市教育委員会の指導のもと、(有)山武考古学研究所が実施した。
3. 調査は、東京レンタル株式会社が行う施設建設工事に伴い、独立行政法人都市再生機構の発注する東谷・中島地区51街区4画地埋蔵文化財発掘調査業務委託として実施した。
4. 遺跡の面積及び調査期間・調査担当は下記の通りである。

調査面積 120m²

調査期間 平成19年3月20日～平成19年3月29日

調査担当 土生　朝治、越智　徹、宮田　和男（山武考古学研究所）

5. 本書の執筆はI-1を大塚雅之（宇都宮市教育委員会）、I-2・3を宮田、II-1～4の遺物関係を越智が、II-1～4の造構原稿及び編集を土生が担当した。
6. 調査期間に於いて、下記の諸氏・諸機関にご指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表するものである。
(順不同・敬称略)
田代　隆、後藤　信祐、梁木　誠、水野　順敏、(財)とちぎ生涯学習文化財団、カワヒロ産業、新成田総合社

凡　　例

1. 第1図は国土地理院発行5万分の1『宇都宮』、第2図は宇都宮市発行2千5百分の1都市計画図II-4を使用した。
2. 本書及び遺物の注記に使用した略号は次の通りである。
砂田姥沼遺跡→UTSU-A 住居跡→S I 土坑→S K 槽状造構→S D
3. 造構実測図中の方位は座標北を示し、土層図・断面図に記した数値は標高を表す。
4. 造構・遺物実測図の縮尺は次の通りである。
造構 全体図……1/150 住居跡……1/60 土坑……1/60 槽跡……1/60
遺物 土器・石製品……1/3
5. 遺物写真図版の縮尺は1/3基本とした。
6. 造構・遺物実測図中のスクリーントーン等の使用は次の通りである。

（造構）



黑色処理



砥石使用面

● 土器

▲ 石製品

目 次

序	
例言・凡例	
I. はしがき	
1. 調査に至る経緯	1
2. 遺跡の位置と環境	1
3. 調査の方法と経過	3
II. 遺構と遺物	
1. 壁穴住居跡	6
2. 土坑・ピット	9
3. 溝	12
III. むすび	12

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	2	第6図 S I 02	7
第2図 遺跡の位置図	2	第7図 S I 03	8
第3図 調査区の位置図	4	第8図 S K01~03	9
第4図 遺跡全体図	5	第9図 P 1~13	10
第5図 S I 01	6	第10図 S D01~03	11

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	3	第5表 土坑一覧表	10
第2表 S I 01出土遺物	7	第6表 ピット一覧表	10
第3表 S I 03出土遺物	9	第7表 S D01出土遺物	12
第4表 S K01出土遺物	10	第8表 S D03出土遺物	12

図版目次

図版1 遺跡全景、S I 01・02・03、S K01・02

図版2 S D01・02・03、出土遺物

I. はしがき

1. 調査に至る経緯

平成18年12月 独立行政法人都市再生機構及び株式会社東京レンタルの担当者と当該地開発のための事前協議がもたれた。当該街区は、埋蔵文化財包蔵地と包蔵地外の箇所が混在し、また包蔵地の一部には（財）栃木県埋蔵文化財センターにより、記録保存のための発掘調査が完了している部分も存在するといった状態であった。

建築計画では、発掘調査が完了していない部分への建物配置も多く含んでいたが、協議の結果事業者は埋蔵文化財の地下保存のために、建築物の配置の見直しを図ることとなった。しかし利用上の制約により全ての建築物を包蔵地外に配置することは困難であった。

そこでさらなる協議の結果、やむを得ず地下造構が破壊される建物基礎やオイルトラップの掘り込み部分については、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。その他の建物や舗装等の構造物については保護層により、地下に影響を及ぼさないと判断できるため慎重工事で対応することとなった。

以後、協議に基づき3月20日に発掘調査を開始した。

2. 遺跡の位置と環境

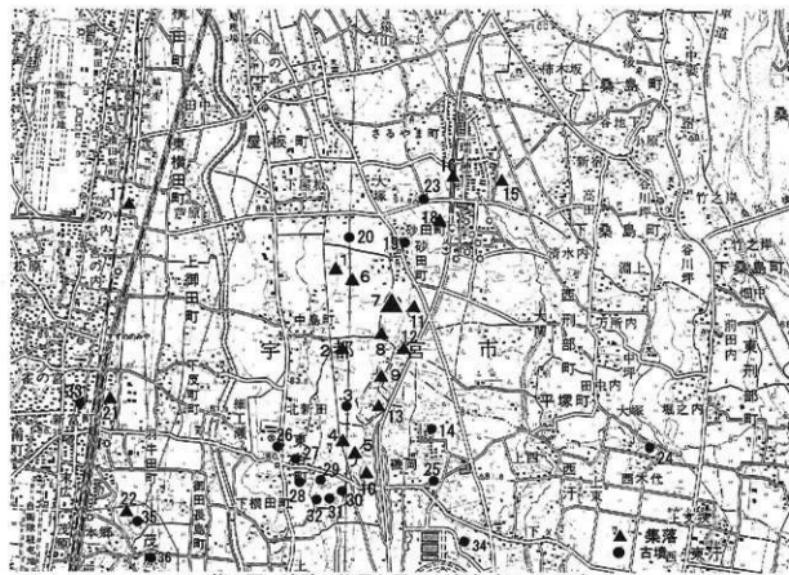
地理的環境

砂田姥沼遺跡は、県南東部、宇都宮市と上三川町の市町境にあり、宇都宮市街地からは南南東へ約7km、上三川町の中心地からは北へ約6.5kmに位置する。東へ約4.5kmには鬼怒川が、西へ約1kmには田川があってそれぞれ南流しており、周辺には起伏の少ない田園地帯が広がっている。本遺跡の現況は、以前は水田や畠等の耕作地として利用されていたが、現在は「東谷・中島地区画整理事業」区域となっており、100haを越える広範囲にわたって先端技術、高度技術産業の研究所や工場や流通業務施設の整備が測られている。また、東側に新4号国道、北側には宇都宮環状線、南側には北関東自動車道が走り、それらと結びついた交通の要衝として発展しつつある。

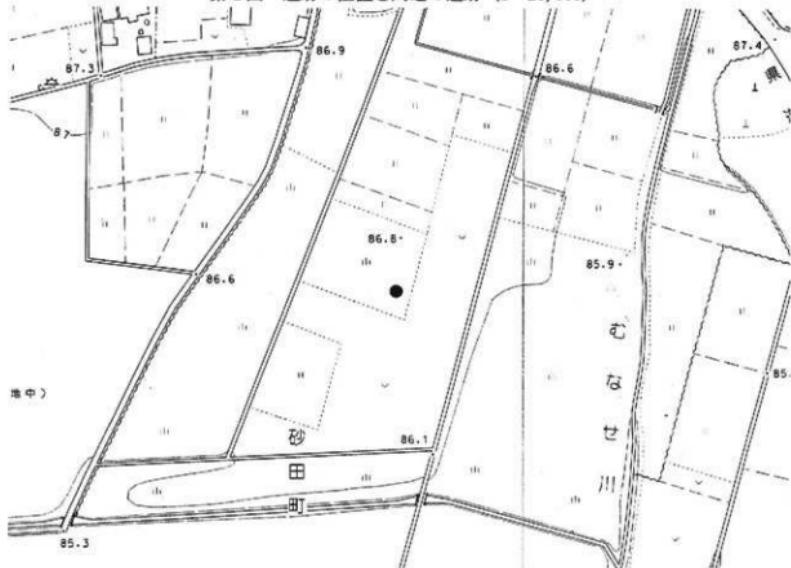
栃木県の地形は、東部山地、中央部低地、西部山地に分けることができる。東部山地は、八溝、鳩子、鷲足などの山塊からなる八溝山地で、西部山地は、那須、高原、日光、足尾などの山塊からなる下野山地と足尾山地である。東西の山地は南北に連なっており、両者に挟まれるように中央部低地が広がる。中央部低地は関東平野の北縁をなし、山地から延びる丘陵、東西に交互に繰り返される台地及び低地・河川からなる。全体的には南に向かって緩やかに傾斜しており、台地を開析する河川はおおむね南流している。これらの台地と低地・河川は、東から、鬼怒川低地（鬼怒川）、岡本・巣岡台地（宝木面・中位）、田原・願成寺台地（田原面・下位）、田川低地（田川）、神主台地（宝積む寺面・上位）、宇都宮・祇園原台地（宝木面・中位）と称されている。

本遺跡は、田原・願成寺台地上にあり、鬼怒川低地（鬼怒川）と田川低地（田川）に挟まれている。両台地内部には、小河川によって形成された細かな開析低地が発達しており、田川低地との比高は8~10mほどである。

本遺跡調査区の標高は約86.5mで、調査区の東側には比高差約1mでむなせ川が流れおり、緩やかな東下がりの地形となっている。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1 : 25,000)



第2図 遺跡の位置図 (1 : 2,500)

歴史的環境

砂田塚沿遺跡の周辺には、南北方向に延びる台地に沿って各時代の遺跡が存在する。特に本遺跡で主体となる古墳時代以降の遺跡は数多く、古墳時代～古代にかけての下野国を中心とする古墳群が存在する。ここでは、旧石器時代から奈良・平安時代にかけての代表的な遺跡について概観してみる。

本遺跡の周辺地域では、旧石器時代の石器や剥片礫群などの良好な資料も増加している。旧石器時代の遺物が出土しているのは、薄市遺跡、西赤堀遺跡、島田遺跡、立野遺跡、杉村遺跡等が挙げられる。

縄文時代では、砂田遺跡から縄文時代早期の陥落穴、島田遺跡からは縄文時代中期の竪穴住居跡や袋状土坑が検出されている。薄市遺跡では縄文時代早期の擦文糸文土器から前期の黒浜式土器、浮島式土器、晚期の姥山式土器、大洞式土器等が出土している。縄文時代後晩期の遺跡では石川坪遺跡等が挙げられる。

弥生時代では、中期後半以降の遺跡が見られ、杉村遺跡、磯岡遺跡、仏沼遺跡等が挙げられ、後期では二軒屋遺跡を始め、瑞穂野団地内遺跡や権現山北遺跡等から同時期の遺構や遺物が確認されている。

古墳時代中期には、笠塚古墳を中心とする東谷古墳群、砂田東遺跡、砂田東遺跡、立野遺跡、杉村遺跡、磯岡遺跡等に見られるような大規模な集落も営まれ、権現山遺跡では豪族居館跡も確認されている。後期になるとさらに集落遺跡の数も増加し、小規模の円墳群が見られるようになる。

奈良時代以降では、本地域は下野國河内郡刑部郷にあたると考えられ、下野の中心地から北北東に延びる東山道が西刑部西原遺跡の南半部の梗概調査部分で確認されている。周辺には上横田A遺跡、猿山遺跡、砂田遺跡、杉村北遺跡、瑞穂野団地遺跡等の奈良・平安時代の遺跡が見られる。

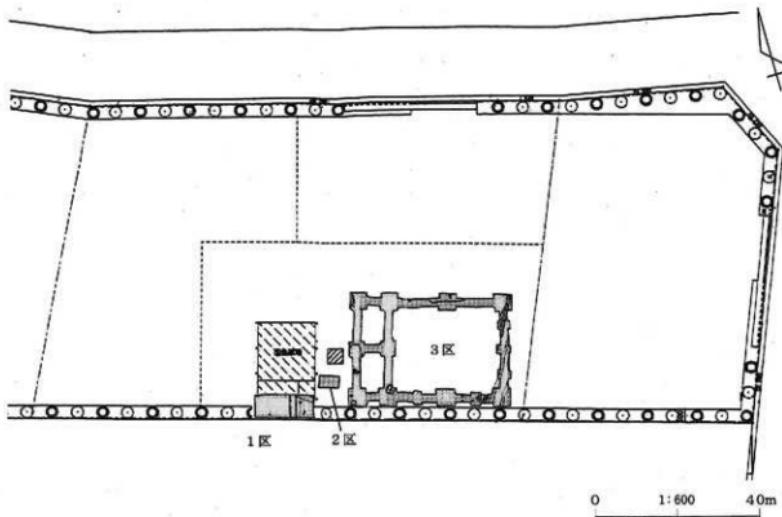
第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	時期 (古墳は墳形他表示)	No.	遺跡名	種別	時期 (古墳は墳形他表示)
1	砂田遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代	19	砂田東遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代
2	立野遺跡	集落跡	縄文～中世	20	砂田A遺跡	集落跡	縄文～奈良・平安時代
3	幸福寺古墳	古 墳	円墳か。	21	牛塚東遺跡	集落跡	縄文～奈良時代
4	権現山遺跡	集落跡	弥生～奈良時代	22	権現山北遺跡	集落跡	E石器～奈良・平安時代
5	杉村遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代	23	下条島西原古墳群	古 墳	前方後円墳1基、円墳2基
6	砂田遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代	24	高・神社古墳	古 墳	帆立貝式古墳
7	砂田峰南遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代	25	足教真浦愛宕塚古墳	古 墳	前方後円墳(後期)
8	中島愛宕遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代	26	双子塚古墳	古 墳	前方後円墳
9	磯岡北遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代	27	籠塚古墳	古 墳	前方後円墳(中期)
10	磯岡遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代	28	鶴舞塚古墳	古 墳	円墳(中期)
11	西刑部西原遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代	29	原古墳群	古 墳	円墳8基
12	幸平裏古墳	古 墳	帆立貝式古墳(後期)	30	草塚古墳群	古 墳	円墳5基
13	杉村北遺跡	集落跡	縄文～奈良・平安時代	31	権現塚古墳	古 墳	円墳
14	西赤堀遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代	32	松の塚古墳	古 墳	円墳
15	瑞穂野团地遺跡	集落跡	旧石器～奈良・平安時代	33	雀宮牛坂古墳	古 墳	前方後円墳
16	猿山遺跡	集落跡	奈良・平安時代	34	西赤堀孤塚古墳	古 墳	前方後円墳
17	吉の内遺跡	集落跡	縄文～近世	35	権現山古墳	古 墳	前方後円墳(前期)
18	上横田A遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代	36	大日塚古墳	古 墳	前方後円墳(前期)

3. 調査の方法と経過

調査の方法

調査は、東京レンタル株式会社が行う施設建設工事に伴う、埋蔵文化財記録保存の措置として行われた。施設建設によって壊される部分の調査のため、倉庫棟と油水分離槽の基礎部分及び洗車場予定地掘削部分の計120m²について調査を実施した。現地での調査は、調査区が3地点に分かれるが、西側の調査区を1区、中央の調査区を2区、東側の調査区を3区とした。造構番号は今回の調査の中で独自に、竪穴住居跡ならばS I 01から順番に通し番号を



第3図 調査区の位置

付することとした。

グリッドの設定は、これまで、とちぎ生涯学習文化財団の行っている『東谷・中島地区遺跡群』の発掘調査に従つて、国家座標第IX系X = +52, 800m, Y = +6, 400mを起点とするグリッドを踏襲した。

グリッド杭は現地に10×10mで設定し、グリッド名称は20×20の範囲を単位として、起点から南へ向かって0, 1, 2, …、東西方向をY軸として起点から東へ向かって0, 1, 2, …と付番した。

調査は表土掘削、造構確認、造構掘り下げ、造構精査、写真撮影、測量の手順で行った。

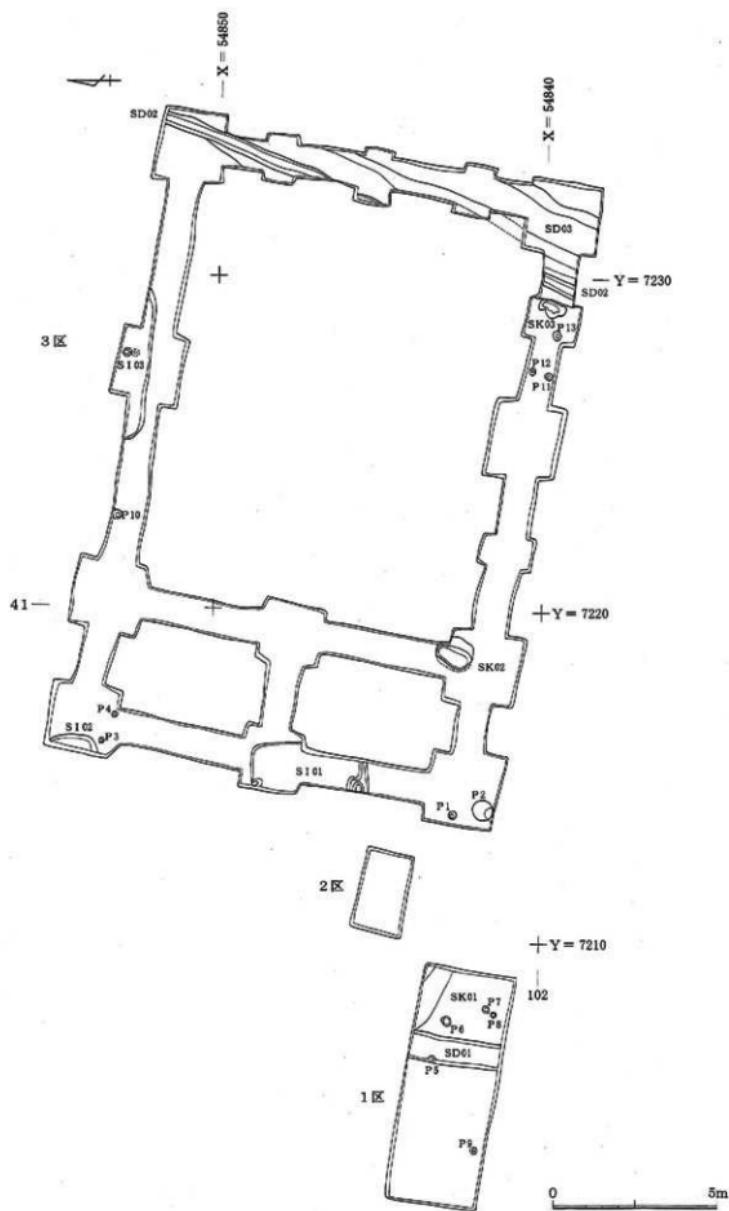
造構の記録は1/20縮尺を基本として平面・断面図を作成し、造構・造物の規模や性格により、1/10, 1/40縮尺を使用した。造跡全測図は完掘個別造構図をもとに作成した。

写真撮影は調査の各段階に応じて随時行い、白黒35mm判、カラーリバーサル35mm判、デジタルカメラを使用した。

調査の経過

調査は平成19年3月20日から平成19年3月29日まで行った。3月20日から重機による表土除去作業を開始した。

調査は洗車場予定地掘削部分（1区）約21m²、油水分離槽の基礎部分（2区）4 m²、倉庫棟基礎部分（3区）95 m²の3箇所の調査区で、1区から表土除去を進め、造構確認作業も後を追つて行った。1区からは土坑1基、溝1条、その他小ピット5基が検出された。2区からは造構は検出されなかった。3区からは竪穴住居跡3軒と土坑2基、小ピット8基が検出された。3月22日から3区の竪穴住居跡、溝、土坑の調査に入った。3月23日には3号住居跡までの掘り込みがほぼ終了し、3月24日から残りの土坑と溝の掘り込みを開始した。3月26日までにはすべての造構の掘り込み調査が終了し、3月28日までに造構図面をすべて終了し、3月29日には調査器材を撤収して現地における調査を終了した。



第4図 遺跡全体 (1:150)

II 造構と遺物

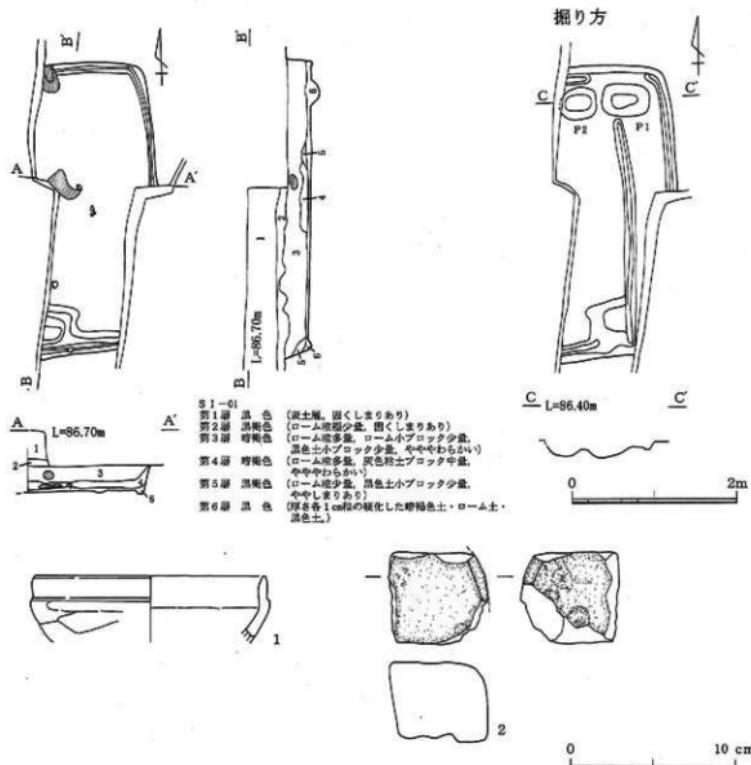
本調査区内からは、竪穴住居跡3軒、土坑3基、小ピット13基、溝3条が検出されている。時期のはっきりしていいる造構は、竪穴住居跡では1・3号住居跡が古墳時代後期で、2号住居跡、土坑、溝は時期が不明である。

1. 竪穴住居跡

S I -01 (第4図、図版1)

位置 102-42グリッド、3区の西端に位置する。重複なし。平面形状・規模 南北3.55m、東西方向は住居跡西側が調査区外のため不明であるが、調査部分では1.50mである。平面形は方形または長方形と推測される。主軸方向はN-3°-Wである。覆土 6層からなる人為堆積である。1~2層は表土層である。3層はロームブロック主体で埋め戻し堆積と考えられる。4層は粘土ブロックを多く含んでいる。6層は床面構築層である。壁残存壁高は0.30mで、壁は外傾して直線的に立ち上がる。

床 床面はほぼ平坦で硬化している。床の掘り方土層(6層)は厚さ1cmほどの黒色土及び暗褐色土とローム土



第5図 S I 01

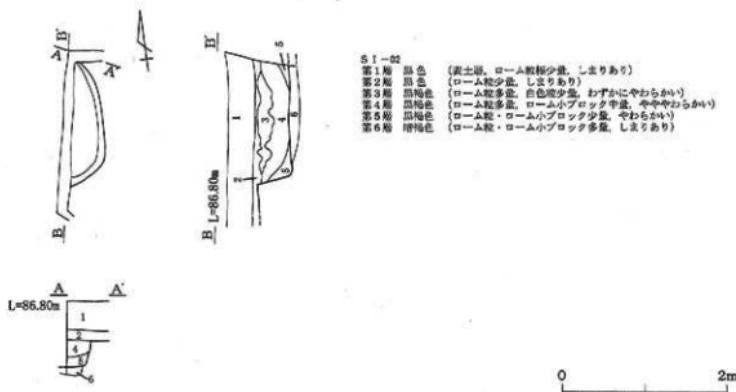
を互層にし、全体で2~6cmの厚さに構築している。床掘り方覆土下から、周溝と思われる溝が確認されており、建て替えが行われている可能性が考えられる。柱穴 調査範囲内では確認されていない。入り口施設 南壁際の周堤状の高まりが入り口に関連するものと思われる。周溝 調査を行った範囲では、住居跡壁際を巡っているのが確認された。断面形は「U」字状で、幅は10~12cm、床面からの深さ約6cmである。また、床下から幅8~14cm、長さ2.8m小溝が東壁際から56cm離れたところで東壁と併行して確認されており、古い周溝の可能性がある。カマド 調査範囲内では確認されていない。出土遺物 1の土師器の壊片が覆土から出土している。2の安山岩製の石皿片は縄文時代のものの混入かもしれない。

第2表 S I 01出土遺物

No.	器種	法量 (cm ³)	特徴	色調	胎土・焼成	〔〕残存値、()推定値	
						出土・残存状況	注記・備考
1	土師器 壺	口径 (14.0) 底径 器高	体部外面ナデ。底部外面ヘラケズ リ。	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	石英粒、黒色 光沢粒 良好	P 1 覆土 口縁部破片	S I 01P1フク 土
2	石製品 石皿	長 [6.0] 幅 [5.0] 厚5.0 重160g	中央部に凹み状の作業痕跡が見ら れる。粗粒安山岩。			覆土 10%	S I 01Na4

S I -02 (第5図、図版1)

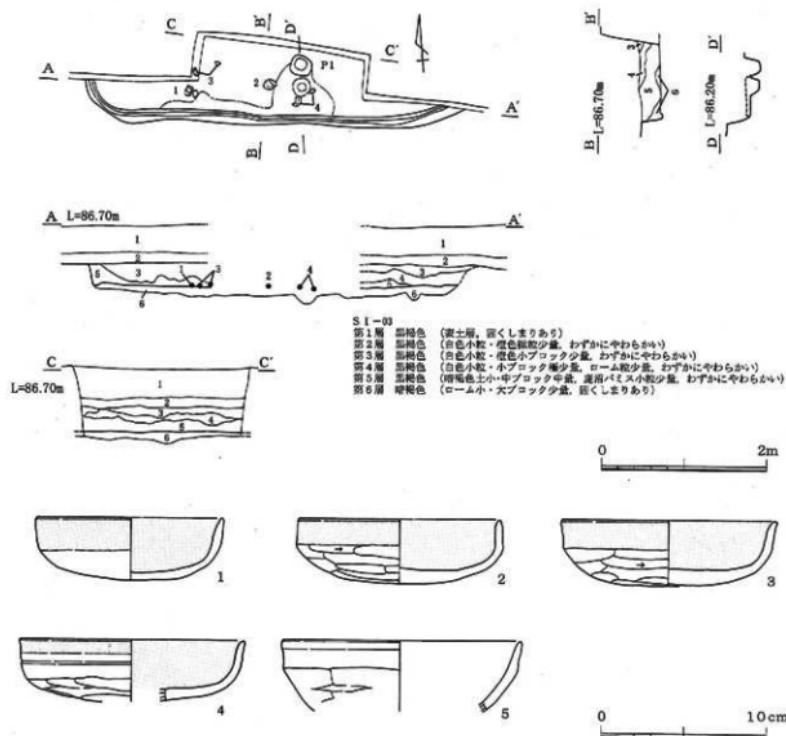
位置 102-42グリッド、3区の北西角に位置する。重複なし。西側は調査区外に延びる。平面形状・規模 住居跡の大半が調査区外になっているため、調査できた部分は南北1.4m、東西0.54mである。平面形は不明であるが、南東コーナー部の形状から方形または長方形の住居跡と推測される。主軸方向は確認された東壁方向からみて、N-3°-Wと推測される。覆土 第6層からなる人為堆積である。1~2層は表土層である。4~5層はロームブロックを含んだ黒褐色土である。6層は床下の掘り方層で、ローム主体で固く締まっている。壁 残存壁高は0.40mで、壁は外傾して直線的に立ち上がる。床 床面はおおむね平坦で、固く締まっている。柱穴 調査範囲内では確認できない。入り口施設 調査範囲内では確認できていない。周溝 調査範囲内では不明瞭であった。カマド 調査範囲内では確認できていない。出土遺物 出土していない。



第6図 S I 02

S I -03 (第6図、図版1)

位置 102-41グリッド、3区の北部に位置する。重複なし。平面形状・規模 住居跡の大半が調査区外になっている。調査できた部分は住居跡の南北0.9m、東西4.40mの範囲である。平面形は不明であるものの、調査した部分を南壁側とする方形または長方形の住居跡で、主軸線はN-5°-Eと推測される。覆土 3層からなる人為堆積である。1～2層は表土層で、3～5層にはブロック状の黒褐色土が認められる。6層は床下覆土層である。壁 残存壁高は0.33mで、壁は外傾して直線的に立ち上がる。床 床面はおおむね平坦で、固く締まっている。また床下(第6層)はローム土主体の暗褐色土である。柱穴 調査範囲では確認できない。入り口施設 南壁際中央やや東寄りに入り口施設と思われるピット(P1)が確認された。平面形は楕円形で、径28cm×24cm、深さ30cmである。床下掘り方からP1と南壁の間に径21cm、深さ13cmのP2が確認された。周溝 調査部分では壁際を巡っているのが確認された。断面形は「U」字状で、幅は3～6cm前後、床面からの深さは約4cmである。カマド 調査範囲内では確認できていない。出土遺物 土師器の坏5点図示した。2の坏は逆位で床上から、1・3・4の坏は南壁際の覆土下層から出土している。5は覆土中から出土している。



第7図 SI -03

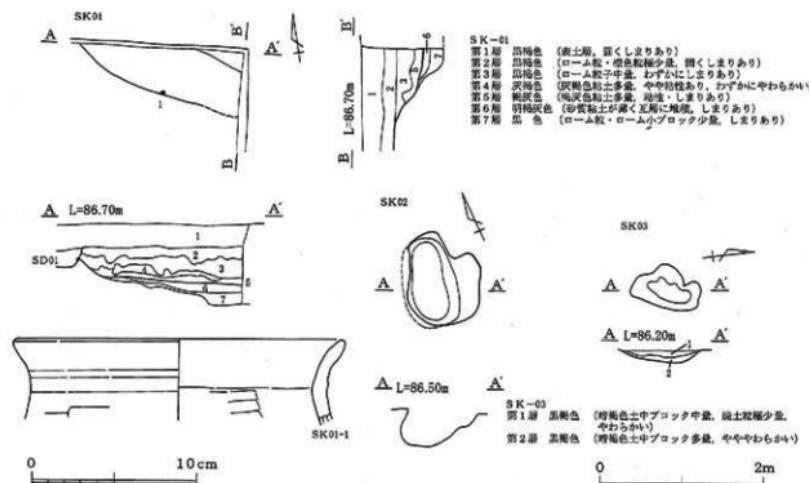
第3表 S I 03出土遺物

No.	器種	法量(cm ³)	特徴	色調	胎土・焼成	〔〕残存状、()推定値		記述・備考
						出土・現存状況	ばば完形	
1	土師器 壺	口径11.2 底径 器高3.9	内外面黒色処理。底部外面摩耗が著しい。	外:灰褐色 内:灰褐色	微砂粒 普通	胎土～床面 ほぼ完形		S103N.5
2	土師器 壺	口径13.3 底径 器高4.0	底部ヘラケズリ。内外面黒色処理。	外:灰褐色 内:灰褐色	微砂粒 普通	床面上 ほぼ完形		S103N.3
3	土師器 壺	口径13.0 底径6.0 器高4.0	内外面黒色処理か。口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。	外:にぶい褐色 内:褐色	チャート織 良好	胎土～床面 60%		S103N.4, 6
4	土師器 壺	口径(13.6) 底径 器高	内外面黒色処理か。口縁部ヨコナデ。体部とビ、シね。底部外面ヘラケズリ。	外:灰褐色 内:灰褐色	微砂粒 良好	胎土～床面 40%		S103N.1, 2
5	土師器 壺	口径(14.6) 底径 器高	口縁部横ナデ、底部外面ヘラケズリ。	外:褐色 内:灰褐色	白色粒極少 良好	胎土 口縁部破片		S103フク土

2. 土坑・ピット(第8図、図版1)

土坑は調査区内から3基確認されている。小ピットは13基確認されている。

S K01は1区の北東角に南北壁と底面の一部が、S K02は3区の南西部で、S K03は3区の南東部で確認されている。S K01は深さ47cmで、壁面が傾斜しており底面は平坦である。覆土に砂混じりの粘土が多く、底面と思われる水平堆積層には特に粘土が多く堆積していた。底面と思われる粘土の水平層の下24cmでロームの地山がほぼ水平にあり、掘り方を持つ造構と考えられるが、2区内に継ぎの造構が見られず、堅穴住居跡の可能性は低いと思われる。S K02・03は造構として記録したが、木の根穴や生物の巣穴の可能性も考えられる。小ピットは掘立柱建物跡の柱穴として配列のあるものは調査範囲内ではとらえられなかった。遺物も出土していないので時期・性格は不明である。規模その他については土坑一覧表、ピット一覧表を参照願いたい。



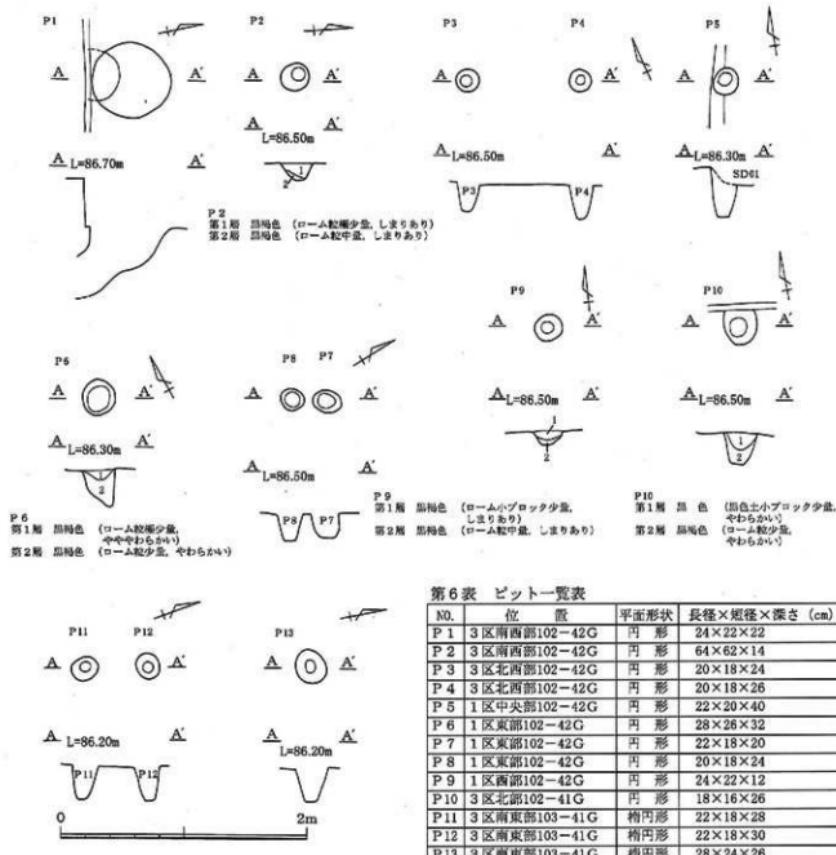
第8図 S K 01 ~ 0 3

第4表 SK01出土遺物

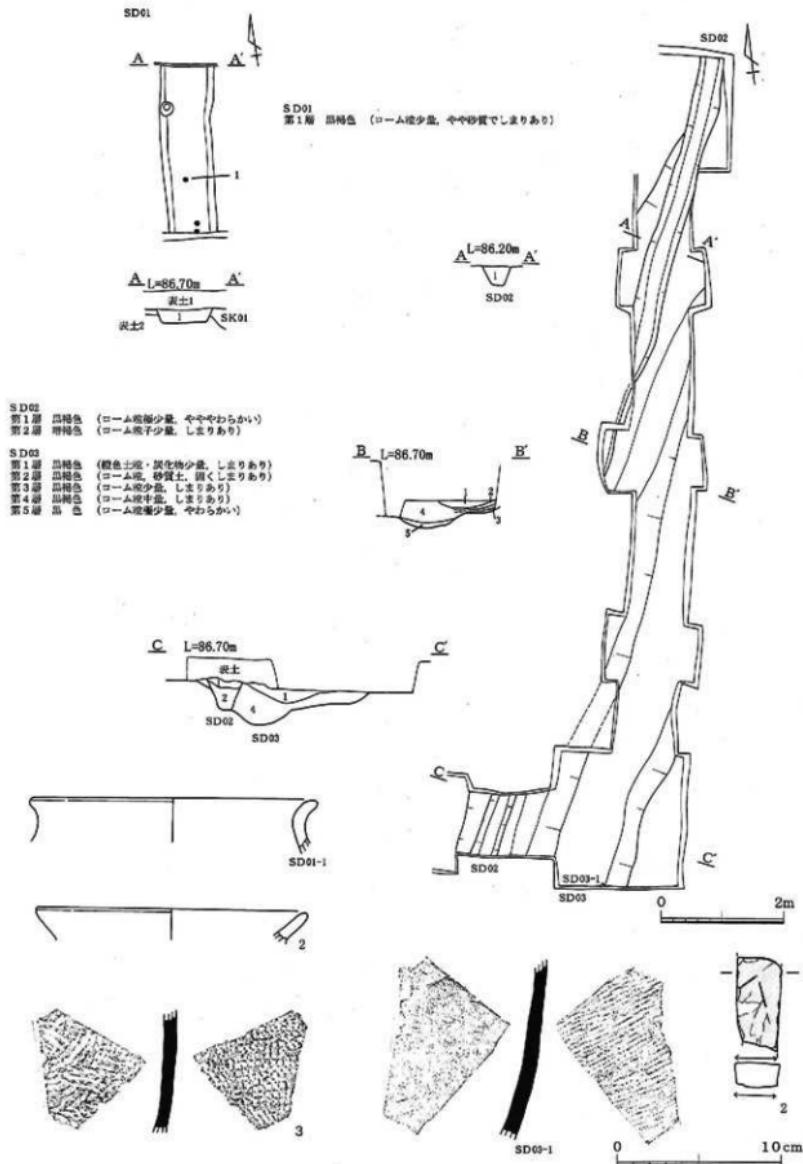
No.	器種 歩量 (cm·g)	特徴	色調	土石・焼成	[] 残存値、() 推定値	出土・現存状況	注記・備考
1	土師器 口径 (10.0) 底径 器高	口縁部内外面ニコナデ。肩上部外 面横方向のヘラケズリ。	外: 黒褐色 内: 灰褐色	右美粒、角因 石、細砂粒多 量 普通	櫻土 口縁部破片	[] SK01No.1	

第5表 土坑一覧表

No.	位位置	平面形状	長径×短径×深さ (cm)	備考
SK01	1区北東部102-42G	不明	(190) × (160) × 100	SD01に切られる。
SK02	3区南西部102-42G	椭円形	110 × 88 × 46	
SK03	3区南東部102-103-41G	不整円形	84 × 52 × 16	



第9図 P 1 ~ P 13



第10図 SD01~03

第7表 SD01出土遺物

No.	器種	法量 (cm ³)	特徴	色調	胎土・焼成	〔〕 残存値、() 推定値	
						出土・残存状況	注記・備考
1	土師器 壺	口径 (17.4) 底径 器高		外:浅黄橙色 内:浅黄橙色	角閃石を含む 良好	板土 口縁部破片	SD01No.3
2	土師器 壺	口径 (15.2) 底径 器高		外:にぶい橙色 内:にぶい橙色	石英含む細砂 粒 良好	板土 口縁部破片	SD01フク土
3	須恵器 壺	口径 底径 器高	胴部外面格子目印き。内面同心円文當て具痕。	外:灰白色 内:灰白色	長石粒少量 普通	板土 胴部破片	SD01フク土

第8表 SD03出土遺物

No.	器種	法量 (cm ³)	特徴	色調	胎土・焼成	〔〕 残存値、() 推定値	
						出土・残存状況	注記・備考
1	須恵器 壺	口径 底径 器高	胴部外面平行印き。内面ヘラナ デ。	外:暗灰色 内:灰白色	長石粒少量 良好	板土 胴部破片	SD03No.1
2	石製品 砕石	長5.7 幅2.7 厚1.5 重37.09g	礫石は全面を使用している。側面 は作業に伴う削削面。梯形型の砾 石か。波紋岩。			板土 両端部欠損	SB3-2 区フク 土

3. 溝

溝は1区から1条、3区から2条の合計3条確認されている。1区から確認されたSD01は幅0.78~0.83m、深さ0.2m、長さ3m以上あり、南北方向に延びている。切り合い関係でSK01よりは新しく、覆土からは小片で古墳時代の土師器片が出土しているが、時期を確定するにはやや決め手を欠く。SD02は幅約0.52m、深さ0.47m、長さ13.5m以上ありSD03を切り込んでSD03とほぼ同じ方向に走っている溝である。ガラスの容器の破片が出土しており、上層覆土に縛まりが無く、近代の溝の可能性を考えられる。SD03は切り合い関係でSD02よりも古い溝で、規模は幅約2.8m、深さ0.6m、長さ13.5m以上である。土層断面から、古い溝が埋没途中で幅を掘り広げ、幅広の状態で底面に硬化面が3面見られ、路面として使用されているようすが窺える。時期を確定できる遺物に乏しく覆土中の遺物は古い時代の土器の混入かと思われる。

III むすび

砂田姥沼遺跡の今回の調査区から確認された遺構は、限られた調査範囲の中であるため個々の性格を明確に述べることは難しい。はっきりとしているのは、古墳時代後期と考えられるやや小型の竪穴住居跡が2軒と時期不明の竪穴住居跡1軒、性格不明の土坑が3基、やや新しい時期かと思われる溝が3条確認されたことである。出土遺物としては、古墳時代後期の竪穴住居跡(S103)から土師器の壊がまとまって出土しており時期の検討には有効な資料となるものと思われる。

(参考文献)

- 栃木県教育委員会 (財) 栃木県文化振興事業団 1999『東谷・中島地区遺跡群N0.1』栃木県埋蔵文化財調査報告書第229集
- 栃木県教育委員会 (財) 栃木県文化振興事業団 2000『杉村・磯岡・磯岡北』栃木県埋蔵文化財調査報告書第241集
- 栃木県教育委員会 (財) とちぎ生涯学習文化財団 2003『東谷・中島地区遺跡群3』栃木県埋蔵文化財調査報告書第274集
- 宇都宮市教育委員会 2005『立野遺跡』A地区

図版 1



遺跡全景（東から）



3区 西側全景（北から）



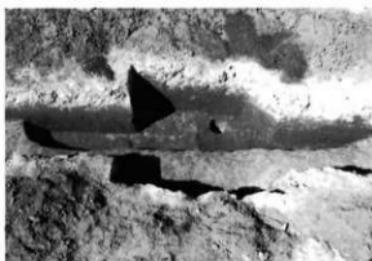
S101 掘り方完掘状況（北から）



S102 完掘状況（東から）



S103 遺物出土状況（北から）



S103 完掘状況（南から）



SK01 完掘状況（南から）

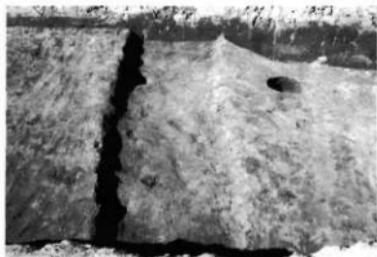


SK02 完掘状況（南から）

図版2



SD01 遺物出土状況（南から）



SD01 完掘状況（南から）



SD02 完掘状況（南から）



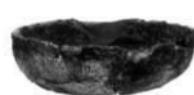
SD03 完掘状況（北から）



S101-1



S101-2



S103-1



S103-2



S103-3



S103-4



S103-5



SK01-1



SD01-1



SD01-2



SD01-3



SD03-1



SD03-2

報告書抄録

ふりがな	せなだらばぬまいせきほくつちょうきほうこくしょ
書名	砂田純沼遺跡発掘調査報告書
副書名	
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書 第60集
編著者名	大塚雅之、土生朋治、越智徹、宮田和男
編集機関	山武考古学研究所
所在地	〒286-0045 千葉県成田市並木町221番地 TEL. 0476-24-0536
発行機関	宇都宮教育委員会
所在地	〒320-8540 桜木町宇都宮市旭1-1-5 TEL. 028-632-2764
発行年月日	西暦 2007年5月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所収遺跡	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すなだらばぬま 砂田純沼遺跡	桜木町 宇都宮市 東谷町 インター パーク 51街区 4 かくち 面地	09201	4356	36°	136°	20070320～ 20070329	120	東京レンタル株式 会社が行う施設建 設工事に伴う埋蔵 文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
砂田純沼遺跡	集落跡	古墳時代	堅穴住居跡 土坑（時期不明） 溝（時期不明）	土師器（壺、瓶、甕）、須恵器（甕） 石製品（砥石）	古墳時代後期の集 落跡。住居跡3軒が 確認されている。
要約				砂田純沼遺跡の調査で、古墳時代の堅穴住居跡3軒と土坑や溝が検出されている。遺跡から出土している主な遺物には、土師器壺・甕、須恵器甕、石製品（砥石）等がある。	

宇都宮市埋蔵文化財調査報告第60集

砂田姥沼遺跡

発行年月日 平成19年5月31日

発 行 宇都宮市教育委員会文化課

(宇都宮市旭1-1-5)

TEL (028) 632-2764

印 刷 梶京文社印刷

TEL 043 (242) 0064